



コラコラ

福武書店

kana juro
唐十郎

シユタイこの娘



唐十郎（から じゅうろう）

一九四〇年、東京浅草に生まれる。

明治大学演劇科卒。六五年から状況

劇場を主宰。七〇年、「少女仮面」で

岸田戯曲賞を、七八年「海星・河童」

で泉鏡花賞を、八三年「佐川君から

の手紙」で芥川賞を受賞する。著書

として他に「腰巻お仙」「ペンガルの

虎」「マウント・サタン」などがある。

フランケンシュタインの娘

一九八七年八月一〇日第一刷印刷

一九八七年八月一五日第一刷発行

定価一三〇〇円

著者 唐 十郎

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南一―三―一八

〒〇三電話(〇三)二三〇一―二三一

振替口座(東京)六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 加藤製本

(落・乱丁本はお取替へ致します)

フランケンシュタインの娘

フランケンシュタインの娘

御安心ください、お嬢さんは揺り椅子の中で眠っています。

一昨日の雷でおびえたようですが、耳を押さえてあげると、利発そうな顔を照らす稲光りにもなれて、うらうらと瞼を閉じておりました。

独特な美人ですね。先生から預かったフランケンシュタインの娘は。

どこかヨーダの娘にも似ています。ヨーダは、八百年も生きる理力の持ち主ですが、沼の化身と通じて作った子は、こんな顔をしているのではないかとも思えます。

毛布を掛けなおしてあげてから、僕も揺り椅子の足もとに寝ころがりましたが、突然、大きすぎる彼女の心音にとび起きました。

ところが、それは雨垂れの音でした。うちは雨漏りがするので、天井の一点から、雨滴が揺り椅子に落ちて撥ねをあげているのです。

もちろん、揺り椅子は移動しました。すると、ヨウ素〇・〇一キュビキュリーを含む放射能雨

の何滴かが、僕の首筋に当って、「やられた!」とつい叫んでしまったのです。

その素っ頓狂な声が、お嬢さんのビロオドのような臉をうつすら開かせ、縮緬のような二重臉にさせてしまいました。

落ちる時に光る雨垂れを見上げる目は、ヨーダの理力を以て、「お前達は更に体験するだろう、止められたことのない力を!」と言ってるようにも見えました。

そこには、感傷的な瞬きもあつて、モスクワの女の子はもつと可哀相よと言ってる感じもいたしました。

が、これも一秒の何分の一かで、お嬢さんはまたうらうらと寝た振りをしてしまいました。

先生、僕は、お嬢さんは眠っていると書きましたが、ここで眠った振りをしていてと書き改めなければなりません。

いわゆる、八月の何日かに、どこかでやられる「ダイ・イン」というやつです。

一体、健やかに眠ることと、眠った振りをすることのどちらが、この娘をより良く成育させることになるのでしょうか。

養若先生、あなたが、T大医学部の研究所で、育てていた娘さんですよ。

それを抱きとった時、養育上のヒントを一つでも僕に与えてくれてもいいのに、あなたは、その場にいませんでした。

まるで、持っつけ、泥棒と言ってるように。

助言は求めません、養若先生。

僕がきつと素晴らしい女の子に育ててみせます。

フランケンシュタインの娘は、美しく成長したら、社交界にうって出るのです。

そして、若き実業界のプリンスと恋に陥ちながら、実りきる恋の直前に、なぜか、その金持ちの坊ちゃんを胸をド突いて、フランケンシュタインの所に帰ってくるのです。

つまり、美しき生物体は、その攪乱の経過のみに生きるといふわけです。

楽しみですね。

この娘を育てあげるのは。

僕に科学者の才はありませんが、雷鳴を待ちわびるフランケンシュタインの習性はあるんです。

いいんですか、僕を育て親にしてしまつて……。

とは言うものの彼女はまだ赤ん坊ですから、これ以上、いい気になるのは控えます。僕は、ただ彼女の将来に夢をふくらませているだけです。

ふくらませ過ぎて、起き上らない彼女を見ると、少し苛立ちもし、実は、願いを込めて、買った靴を履かせました。

小さな赤い皮靴です。

それともう一つハイヒールも買つてきました。これは大人用で、履かせてもブカブカですが、

とがったヒールだけでもぎとって、ヒールのない靴は、今、台所の隅に放りだされております。
もぎとったヒールはどうしたのかと申しますと、それは彼女が履いている小さな靴のかかとの
のりづけしました。

だから、彼女は今、小さなハイヒールを履いて眠っているのです。

見下ろすと、横になって歩いた後に、ちよつと足踏んでいるようにもみえます。

そこで見下ろすのをやめて、僕も横になったりします。すると、世界を横から見ると、二人は
立っているような気がします。

雷があつた一昨日の次の日、つまり昨日のことですが、そんなふうにして、彼女は小さなヒールを立てて横になり、僕もまた横になっていますと、アパートのドアを蹴開けて、垂直人の女が入ってきました。

女は恋人のウテナです。ウテナと出会つたのは半年前の銭湯、亀湯の前ですが、それよりな
となく男と女のなるがままの関係になっています。熱烈な相思相愛という感じは、まるでなく、
ぼんやりと恋の綾取りをしているといったらいいでしょうか。

そして、この綾取りは、僕の方が少し無理しています。

それは出会いの当初からそうでした。ウテナは、銭湯の前で、降りだした雨に帰るに帰れず立
ちあぐんでいました。男湯から出てきた僕は、そのウテナを見て、雨傘をさしだし、姫の足元に
マントを投げ与えたナイトよろしく、一人、雨の中を駈けだしました。

つまり、女に傘をあげて、自分は放射能雨の犠牲になったわけですが、こういうことをする男はあまりいません。でも、一度やってみたいと思ったので、かくなる決行に及んだのです。

雨の中を駆けだしながら、キザったらしいと思っているのじゃないかと恐れましたが、三日後、傘を返すために亀湯の前で立っていたウテナは、背を丸めて去った姿が「かわいい」と言ってくれました。

ウテナは「かわいいもの発見同好会」にも入っています。

その同好会は、どういうメンバーで成りたっているのか分りませんが、それを知ったのは、「かわいい」と言ってくれた日の三日後です。

やはり、雨が降っていました。男湯から出てきた僕が、やっぱり降ってきたなと傘を開くと、女湯の前で待ちあぐんでいたウテナは、その傘、もう一度あたしにくれてみてと迫ってきました。

「する」よりも「される」味をおぼえたなと苦々しく思いましたが、傘を言われるがままにさしだすと、ウテナは、さあ、雨の中に飛んでつてと言うのです。

もちろん、飛んで行きましたよ。

すると、ウテナばかりか、数十人の黄色い声が、背後で「かわいい！」と合唱されました。

その連中が、ウテナの参加する「かわいいもの発見同好会」のメンバーだったのです。

このメンバーは、ダイアナ妃が日本に訪問された日も、空港にはせ参じ、妃を乗せたジャンボ

ジェットが曇り空から、ゆっくり下降してくるのを見て、「かわいい」と言ったそうです。

どうやら、かわいいものは人間だけでなく、鉱物の固まりにも言い当てられるようなのです。

雨の中で聞いた「かわいい」を僕は時折思い出します。振り返って、「かわいい」と喚く精を見ながら、それが嬉しいのかどうか僕には分りませんでした。

僕は本物の雨が降る学芸会に立っているような気持でした。

この驚愕は今でも判然としませんが、雨の日の傘一本で、ウテナと僕の関係は、DNAのようにじれて上昇しました。

お互いのアパートに遊びに行くようになり、好きな音楽を聴くのにあきると、互いの匂いを嗅いだり噛みつき合うようになった次第です。

そして、半年の間、ウテナが、僕の中に相もかわらず、「かわいい」ものを発見しようとしているのに、ずいぶんと手こずりました。

僕は「かわいい」ものを、それ程持っているわけではありません。「かわいい」どころか目も当てられないものが、僕には一杯あります。それが、時折、ボロリとウテナの前に出ると、ウテナは涙を浮かべてこう言うのです。

「どうして、そんな意地悪するの？」

僕の中の、目も当てられないものの中で一番ひどいのは、呆けている時です。

テレビの時代劇を見て、僕は何時間もウテナと話をしない時があります。寝そべて足を組む

と、ズボンがずれて、モモヒキのゴムがとびだしました。

ウテナは、時代劇とモモヒキが、「かわいい」ものの反対にあると思っています。それで、意地悪が、ウテナの心に貯金され、半年後の今では、僕は「かわいい」のではなく、「かわいい」ものに意地悪をする男になりました。

殊に、フランケンシュタインの娘を連れてきてしまったのは、決定的であったようなのです。仁王立ちになったウテナは、薄暗い部屋を見回し、揺り椅子に目を止めると言いました。

「なあに、その毛布でくるんであるものは？」

ドキリ、ドキドキ、僕は、揺り椅子の前行き、毛布からとびだしている小さなハイヒールを包みました。

「 فرانケ先生から預かっているお嬢さんだよ」

フランケ先生の名前を聞くのが初めてのウテナに、それはアダナで、養若先生の、今日あられる業績と、その医学界に於ける位置とをこまかく説明しました。

「その先生が、どうして、あなたに赤ちゃんを預けんの？」

その問いに僕は、先生のプライドをひどく傷つけることを言っていました。

眠るその子は、先生が、池袋のキャバレー女に産ませた子だと言ってしまったのです。そう言う前に別の答えようもありました。この小さく見える子は、本当は先生の恋人で、蛇にかまれて地獄に堕ちたところを、地下鉄で地獄に急行した先生が、とりあえず救出し、地下鉄の階段から

地上に出かかったところを、つい振り返ってしまったために、恋人は、みるみるうちにしぼんで、こんな小さな眠れる姿になってしまったのだと、オルフェ神話を勝手にねじ曲げたようなことも思いつきました。

が、それを口に出したらば、納得させるのに何日もかかるでしょうし、僕は、もっとも俗っぽい嘘をついてしまったのです。

「ぶつつんもんね」

とウテナはあきれた顔で、腕を組みました。なんででしょうか、このぶつつんもんていうのは。ウテナは、時折、二、三日しかもたない流行語を使うのです。

「ぶつつんもんよ。心酔するあなたに、そんな女との子を預けるなんて」

「でも、僕は、ひとつも苦にしないんだから」

とは僕の言葉です。御安心下さい、先生、僕は苦勞も苦心もしてません。

「でも、あたしは苦よ。こんな子を預かるなんて」

「君は九でも、僕は九じゃないんだから、クク、ハチジュウイチにはならないよ」

ウテナに、かわいくない所を見破られないために、僕は、よくこういう意味不明な返答をすることがあるのです。ですから、あまり深く考えないで下さい。

「ちよいと、あたしにだって母性愛はあんのよ！　こんな子が横にいて、見捨てた振りはできな
うじゃないの」

「頼むから、見捨ててほしい」

そう言うのと、僕は、ウテナに背を向けて揺り椅子を静かに動かしました。

ウテナに関与されなくなかったのです。フランケンシュタインの娘は、婚前期の春を謳歌する女なんかに触れさせたくないのです。だって、ウテナが恐がる雷鳴を、このフランケンシュタインの娘は、もつとも愛すのですから。どんな拒絶反応を放射させるか分りません。

「でも、見て見ぬ振りはできないでしょう？ あたし、一、二、三日、ここに泊まり込むんですもの」

まことに迷惑千万な宣言に振り返ると、ウテナは、掃除当番のトラブルで、アパートの管理人と喧嘩して、「出る」と言ってしまったらしいのです。とはいっても、荷物を僕の部屋に持ち込むのではなく、別のアパートを見つけるまでの二、三日、帰りづらい部屋には戻りたくないのだ、置いてくれということでした。

「そういうことなら……」

「かわいいわ。そう言って揺り椅子を動かすあなたのお父さん振り。あ、それから、もうひとつ、父さんを泊めてほしいの」

「どこのお父さん？」

「江反家の、あたしの父さん」

「お父さん、上京すんの？」

「で、一緒にね、一緒に泊めてほしいの」

そういうことになる、狭い部屋に四人が起居することになります。なぜ、お父さんぐらい、ホテルに泊まらないのかと、僕は怒鳴りだすところでした。

それに、将来に夢をはせる女が、お父さんに、僕のような男を見せてもいいのでしょうか。

僕は言いましたよ、誤解されるって。現在から将来にかけての夫は僕と誤解されると。すると、ウテナは言うのです、その誤解が狙いだと。

「父さんは、あたしに、田舎の豚飼いと一緒にさせようとしてんの。もう、二十五も過ぎたし、お前に好きな人がいないなら、そろそろ、身の振り方を考える時だって」

「田舎には、今でも豚飼いなっているの？」

「朝は豚飼い。昼はスーパーマーケットの支配人。夜は、カラオケ飲み屋の主人と手広くやってる人らしいの。でも、田舎にはかわいいもんがないから、あたし嫌なの。それでね、父さんに、あたし、あんたを見せたいの」

「豚飼いと結婚をあきらめさすためにかい？」

「あなたを結婚する人とは言わないわ。今、身を焼きこがしているかわいい人がこの人だって見せてあげたいの」

それで、亀湯にお父さんと一緒に入ることまで約束させられてしまいました。それも雨の日を狙って、お父さんに傘を渡し、一人、放射能雨の中を駆けだすことまで。

約束はしたけれども、僕は、お父さんに傘を渡しかけ、お父さんが握ろうとした瞬間、お父さんを雨の中に蹴倒すかもしれません。ともかく、江反家のお父さんを迎えることを確約させられました。

「よかった」

と言いながら、ウテナは揺り椅子を振り返ってまた言いました。

「この子だけはよくないわ」

「どうして？」

「だって、あたしとあなたの子って思われちゃうじゃないの！」

なんといい言い草でしょうか。僕をかわいい人と言っておきながら、そのかわいい人との間に、子供ができてはいけないのでしょうか。

この女性の中にひそむ馬鹿らしさと計算だかさが、危うく僕を粗暴なものに変えさせるところでした。

が、かっとしてはいけないのです。かっとすることはかわいくないのですから。

「そうだね。二人の子と思われてしまうね」

「先生のところに返してきて。二、三日でいいんだから」

「先生のところには返せないよ」

「どうしてよ」

「先生はニュールンベルクの学会に出張なさっちゃったし」

「いい気なもんね」

「奥さんのところに持ってくわけにもいかんだろう」

「じゃ、産んだ女のところに戻しましょうよ」

「産んだ女が、育てきれんと先生のところに戻ってきたんだよ」

これは、もちろん嘘です。お許し下さい、先生、そういった言い逃れしかなかったものですか。

「どんな子？」

とウテナは揺り椅子に走り寄り、首までかかった毛布をひっぱがしかけました。ウテナに触らせたくない、ウテナには分ってもらえないと思うためか、毛布をつかんだ手首を押し返し、僕は「分ったよ」と言ってしまったのです。

「その女のところに戻してくるよ」

一体、そんな女がどこにいるのでしょうか。先生だって、フランケンシュタインの娘を産んだ女を探すのは至難の業でしょう。この娘は、或る闇の回路を通じて先生の研究室に運ばれてきたことは承知しています。また、その回路は逆戻りなど、とうてい出来やしません。なぜならば、このフランケンシュタインの娘に限って、産んだ女との間には忘却のシャッターが降りているのですから。